若妻の秘蜜

堕ちゆく美沙子の爛れた日々

斐芝嘉和
挿絵／asagiri

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

プロローグ …… 4
第一章　狙われた人妻 …… 13
第二章　強制 …… 54
第三章　狂宴 …… 103
第四章　背徳の夜 …… 162
第五章　堕ちゆく人妻 …… 216
エピローグ …… 283

登場人物 *Characters*

城薗 美沙子
（しろぞの みさこ）

旧姓・木原。夫の泰之と職場結婚した若妻で、仕事に励む彼を陰で支える主婦。恥ずかしがり屋で目立つことや派手なことが苦手な性格。

城薗 泰之
（しろぞの やすゆき）

美沙子の夫。三十間近の会社員。現在は単身赴任により自宅を空けていることが多い。

佐原 貞弘
（さはら さだひろ）

泰之の叔父。会社では上司にあたる。美沙子の元上司でもあり、美沙子と泰之の仲人をつとめる。

津山 裕三
（つやま ゆうぞう）

高級クラブ「ラ・ローズ」の支配人。

予想以上の熱さ、硬さに、息が詰まった。
「へへへ、イイな。本当にイイ。並みのホステスじゃあこうはいかねぇ」
南部の笑い声が降って来て、反抗心を掻き立ててくれなければ、あまりの気持ち悪さに失神していたかもしれない。
（と、とにかく……）
握ってしごけばいい、それだけでいい。ほんのしばらくの間だけ気持ち悪さを我慢すれば、この状況から抜け出せる――己に言い聞かせ、指先に力を込める。
「う、うぅ……」
指や掌に感じる、じんわりとした熱さ。
ずっしりとした重み、鋼のような硬さ。
夫にもしたことがない、生まれて初めての手淫に、美沙子の心は千々に乱れた。
穢(けが)らわしい、気持ち悪い――と思う一方で、暴発しそうなくらい強張っている牡肉の存在感に胸がドキドキしてしまう。泰之のペニスも、美沙子とするときにはこんなに硬くなっているのだろうか？　こんな凶悪な形をした、こんなに太くて長いモノが、本当に自分の胎内に入ってくるのだろうか――と。
「もっと強く握れよ、奥さん。なんだったら口で咥えてもいいんだぜ？」

低い声で唸った南部がヘソの高さにある美沙子の頭に大きな手を置き、艶やかな黒髪を荒々しい手つきで掻き回した。怯えながらの手淫ではあまり気持ちよくならないのか、言動に苛立ちが感じられる。

（手で触れているだけでもこんなに気持ち悪いのに、く、口でなんて……無理！）

追い詰められた美沙子は、いつか見たアダルトビデオを思い出し、裸の女優たちがしていた様々な手技を再現しようとした。

淫茎を握って前後にしごきつつ、親指の腹で亀頭の先端を拭う。指先を肉棒の根元へ向け、掌を縦に使って男根の背を撫でる——両手で挟んで揉んだり、親指と人差し指で作った輪でカリ首を集中的に締めたり。

精一杯頑張っているつもりでも、おっかなびっくりではやはり、どうしても刺激が足りないようだ。

「……ったく、しょうがねぇ奥さんだな！」

痺れをきらした南部が荒々しく動き、しゃがみ込んだ美沙子の腕を掴んで強引に立ち上がらせた。

「や……ま、待って！」

「いつまでも甘えたことぬかしてんじゃねぇぞ、牝豚ァ！」

蒼褪めた人妻の耳元で怒鳴り、震え上がらせてから、一転口元に凶悪な笑みを浮かべて猫撫で声を発する。
「女の価値は第一に見た目、第二に身体だ。奥さんは見た目がいいから、俺は手コキで許してやろうと思ったんだぜ？　それなのに、あんな気の抜けたしごき方をされたんじゃあ、俺の心遣いを足蹴にされたようなもんだ」
「そ、そんな……私、そんなつもりは……」
「うるせぇっ！」
再び怒鳴った南部が、美沙子の細い肩を乱暴に突いた。
「うぅっ⁉」
痛みと恐怖に息を呑んでいるうちに腕を取られ、荒々しく揺さぶられ――身体の向きがクルリと反転してしまう。
「本当に違うの、違うんです！　私、夫にもああいうこと、したことないから……お願い、もう一度やらせて。今度はちゃんと、一生懸命しごきますから……」
「あんなんじゃあ、何度やったって同じだ」
鼻息荒く決めつけた南部が、壁に縋りつくような格好になった美沙子の背に、覆い被さるように抱きついた。

「うぅっ!?」
細いウエストに太い腕が蛇のように巻きついてくる、揺れる黒髪に頬摺りされて、剥き出しの白い肩を強張らせながら小さく呻く美沙子。
「俺がせっかく与えたチャンスを、奥さんが台無しにしたんだ。手コキで満足させてくれなかったんだから、穴に打ち込むのは当然だろう?」
「そ、そんな、勝手な……く、うぅ……」
個室の壁に押しつけられ、虚しく藻掻いているうちに、南部の手が荒々しく動いて長いスカートを捲り上げられてしまった。湿った薄明かりに白く伸びやかな脛(すね)がくねり、肉感的な太股が瑞々しく輝いて——顕わにされた尻肌に、鋼のように硬い淫棒が直接擦りつけられる。
「真珠入りのペニスは初めてか? 初めてだろうなあ。ずいぶんイイらしいぜ、旦那のモノでは満足できなくなるくらいにな」
「い、嫌……やめてッ! こ、こんな……こんな、こと……」
掠れた声を絞り出し、美沙子が藻掻けば藻掻くほど、背にのしかかる重圧は増した。こういうシチュエーションに慣れているのか、手探りしている南部の指は美沙子の下着を探り当て、股布の端を引っかけて素早く横へずらす。

「ぁあ……ッ！」
乱暴に動かされた薄布が、尻房と秘裂に喰い込んできた。撚(よ)れた下着にクリトリスが挟まれ、激痛にも似た快感が強制的に産みつけられる。
それに――。
（か……感じ、る……どうしてっ⁉　こんなの嫌なのに、怖いだけなのに……）
意思に反して剥き出しにされた秘部が、自分でも恥ずかしくなるくらいそわそわしていた。南部に揉まれた乳房に淡い淫悦が湧いてしまったように、股間の媚肉にも酒精が回り、普段より何倍も敏感になっていたのだ。
「お？　へへへ……嫌だ嫌だと言う割に、ここはしっかり濡れてるじゃねぇか」
「う、嘘……ッ！」
「嘘なもんか。ほら……」
「あ……や……ダメぇっ！」
武骨なくせに憎らしいほど器用な指先が、美沙子の割れ目に触れ、火照る肉畝を掻き分けた。秘かに熟し、はしたなく潤んでいた淫唇が、ぬちゅ、くちゅ、と微かな音を立てて擦り潰される。
「へへへ……俺のチンポを見て興奮しちまったのか？　大人しそうな顔をして結構好

き者なんだな、奥さん」
「ち……違いますッ！」
「いまさらなにカマトトぶってるんだ？　ああ？　夫以外のチンポを見て、握って、オマ〇コをこんなにぐちょぐちょに濡らして――立派な淫乱じゃねぇか」
「違う、違う違うッ！　わ、私は、そ、そんな……あッ⁉　ぁあ……ッ！」
悲鳴は無視され、燃え出しそうなくらい熱い肉塊が美沙子の秘裂に押し当てられた。肉畝が掻き分けられ、淫唇が擦り潰されて、
（ああダメ、嫌……入って、来るぅう……ッ！）
夫以外の男根が、美沙子の媚肉を抉る。
当たり前だがそれは、泰之のモノとはまったく違っていた。
やや小振りな亀頭がいつもと違う場所をしごき、抉り、掻き分ける。美沙子の奥穴を押し退け、こじ開けて――捩れのきつい肉茎が膣口をこじり、コパ、コパ、と奇妙な音を立て始めた。
それに、この――壺口付近を何度も何度も出入りする小さな硬さは、裏筋に埋め込まれていたいくつもの真珠だろうか。
（違う、これ……違う……泰之さんのと、全然……違うぅっ！）

あまりにも異なりすぎる感覚のせいで、夫以外の男と交わっているという事実を嫌というほど思い知らされた。
しかも相手は、絶対に好きになれないタイプの男だ。
そんな男の淫棒が、深く深く美沙子を抉る。
夫のペニスよりも長いから、
（あっ!?　あ……あ、当たって……お腹の底に、当たるッ!?）
ヘソの裏側辺りに、美沙子の知らない衝撃が刻み込まれ始めた。
「ふぁ……う、ぁあ……ッ!?」
生まれて初めて体験するその感覚は、熱くて重い。
激痛に似ているが痛みはなく――ただ、身体の芯が痺れるような衝撃が何度も何度も、腹の奥底に打ち込まれる。
「分かるか、奥さん？　アンタの一番深くて柔らかい場所に、俺のチンポが当たっているぞ。そら、そら……そらっ！」
「やぅッ!?　く……う、うぅ……ッ！」
おそらく夫も知らないであろう、美沙子の胎内に隠れていた未踏地が、粗暴なヤクザに蹂躙（じゅうりん）される。

しかも許しがたいことに、それは嫌なだけではなかった。
（も、燃える……身体の芯が、あ、あ……熱い……）
猛る亀頭に突き揺さぶられた子宮が、沸騰しているようだ。
荒々しく動く男根に擦り潰された膣襞にも、硬くコリコリとした真珠に揉みまくられている膣口にも、美沙子の知らない快感が刻み込まれてしまう。
（ち、違う……気持ちよくない……こんなの、全然、気持ちよく、ないッ！）
己自身に必死に言い聞かせていないと、淫らな声がこぼれだしてしまいそうだ。
だから懸命に唇を噛み、薄い瞼をきつく閉じて、恥辱の時が過ぎ去るのをジッと待っているのに――。
「へへ、どうだ、奥さん？　旦那のモノと比べてどうだ？　ああ？　気持ちよかったら声を上げていいんだぜ」
若い牝の肉体を犯すことよりも貞淑な人妻の気持ちを踏み躙っていることが嬉しいのか、啜り泣く美沙子を壁に押しつけた南部が耳元で唸る。さらに重圧を強め、腰の動きを激しくして、羞じらう人妻を無理矢理にでも鳴かせようとする。
（こんな、非道い……こんなの、非道い！）
猛り狂う牡と固く冷たい壁の間に押し潰されて、美沙子は溢れ出しそうになる声を

必死にこらえた。南部のような男の思い通りになるのも悔しいし、なにより――。
（非道い、のにぃ……どうして感じてしまうの？　どうして痺れてしまうの？　私って、こんなにいやらしい女だったの……!?）
身体の芯に渦巻き始めた心地よい荒波を、羞じらう理性が認めない。
夫以外の男を知らない美沙子は、泰之のやり方で十二分に満足していた。最近でこそイかせてもらえないという不満はあったが、翌日になれば忘れてしまう程度なのだから、なにも問題はなかったはずだ。
なのに――。
泰之とはまるで違う、獣のように荒々しい南部の動きを、美沙子の膣穴はあからさまに歓迎していた。捩れのきつい淫棒が前後するたび、くぼちゅ、くぼちゅ、と鳴らされる秘裂に熱い波紋が繰り返し生まれる。いくつもの真珠に捏ね回された壺口は心地よく痺れ――たくましい牡肉に絶え間なく突き揺さぶられた子宮が美沙子の知らないねっとりとした淫悦を発し、頭の中まで蕩けてしまう。
「どうした奥さん？　声も出せないほど感じてンのか？」
「ち……ちが……あっ!?　くぅっ!?」
胸を揉み歪めていた南部の指に、乳首を強く抓（つね）られた。

「ふぁ……あっ!?　あぁあっ!?」
いきなり始まる、力強い律動。
――いくら力強いと言っても、若いころに鍛えた肉体を駆使し、美沙子の蜜壺を入口付近から奥深くまでしっかり抉ろうとする泰之に比べれば、やや弱い。
その代わりにリズミカルで素早く、荒々しい。
抉るとか抜き差しするとか言うよりむしろ、繰り返し繰り返し打ちつけてくるような、短いスパンの突き込みだ。
「あらぁ、徳田さんったら張りきっちゃって！」
「そんなに乱暴にしたら、ミサちゃん壊れちゃうわよ」
嫉妬混じりに笑った女たちが、すっかり抵抗しなくなった美沙子の胸から手を離す。
自由を得た形よい乳房は、速く激しい突き込みに合わせて小気味よく揺れ躍り――。
「あぅ、ああ、ぁあああっ！」
羞じらい悶え、淫悦に喘ぐ美沙子に、新たな恥ずかしさを覚えさせた。
(感じる、感じる……感じて、しまうぅ……ッ！)
女たちの手で弄り回され、快楽神経が昂ってしまったのか、吉野にされていたときとは比べものにならないほどの肉悦が躍る双球に充満した。徐々に深度を増す太く硬

い男根に荒々しく犯されている膣穴と、突き込みに合わせて小気味よく揺れる乳房の間に、熱く心地よい波が往復する。

（なに、これ……こ、こんなことが、ある……の!?）

燃える糸蚯蚓（みみず）が数千匹、数万匹も、双球に張り巡らされている乳腺の中で暴れまくっているような、ジリジリと熱くもどかしい、痺れるような気持ちよさ。しかもそれは徐々に徐々に――弾む乳房を這い上がり、胸先に赤々と輝いている乳首を目指して、次第に集まってくるようだ。

正常位でしかしない泰之は、己の厚い胸をいつも美沙子の乳房に押しつけ、身体全体で捏ね潰そうとしているかのように責めてくる。挑発的に揺れる美乳を目にすると乱暴にしたくなってしまうからというのがその理由だったし、ほかの人よりやや大きくてしかもいつも得意気に張っている乳房を美沙子自身も恥じていたから、泰之のやり方に不満を覚えたことはいままで一度もなかった。

だが、これは――奔放に躍りまくる己の乳が、こんなにも気持ちよくなるなんて。

（違うの、ダメなの、こんなの間違っている……泰之さんが正しいし、泰之さんのほうがずっとずっと優しい……泰之さんのやり方が、私には一番合っているの……）

夫よりもイイ、こういうことを夫にもしてもらいたい――そう思う自分を許せず、

両手で顔を覆ってイヤイヤと首を振る美沙子。弾む乳房を押さえなかったのは、いま触れればきっと、周囲の目も気にせずに揉みまくってしまうだろうという予感があったからだ。

生まれて初めて知った乳房の悦びに勃起乳首がさらに強張り、甘噛みしてくれる歯や捏ね潰してくれる指を求めてジクンジクンと疼き始める。やや大きめの乳輪も赤みを増して盛り上がり、香汗に濡れて桜色に輝く乳肌に、縁をくっきり際立たせる。

弄って欲しい、揉んで欲しい――蕩けるまで揉み潰してもらいたい――。

奥手の美沙子を内側から苛む、淫らな欲望。

だが、男たちはそれに気づかず、

「ダメだよ、奥さん。ようやくイイ感じに弛んできたそのお顔を、我々にもっともっと、しっかり見せてくださいよ」

羞じらう人妻を追い詰めるつもりか、美沙子の細い手首を掴み、茹だったように紅い顔から両手を引き離した。

「あ……ぁああ……ぁあ、あぁ、あああ……ッ！」

いやらしく笑み崩れた男たちと、目が合ってしまう。

「おお、イイ顔だ。もうすぐイきそうなんだね」

（嫌、見ないで、見ないで……！）
心は羞じらい叫んでいるのに、声は出ない。
反論はもちろん、否定すらできない。
男に指摘されるまでもなく、絶頂の予感がすぐそこまで迫っているのだから。
熱っぽく潤んだ瞳が覗き込む男を縋るように見つめ、喘ぐ唇が上擦った吐息をこぼし、蕩けた目元に法悦の涙が滲む。茹だったように紅い頬、恍惚に弛んだ口元、とめどなく嗚咽を漏らし続ける細い喉――。
「なんてみっともない顔だ。徳田さんのペニスがそんなに気持ちイイのかね？　妬けるなあ、しかし同じ穴で競う自信は、ちょっとないしなあ」
徳田と肩を並べて美沙子を覗き込んでいた男が、いやらしい笑みを深めてローテーブルを回り込んだ。はぅ、はぅ、と突き込みに合わせて上擦ったよがり声をこぼしている美沙子の頭の先へ。
「保川（やすかわ）さんは、そちらが好みでしたなあ」
心得た徳田が腰の突き込みを強め、
「ふぁっ!?　あ……うぅ……ッ!?」
絶頂寸前まで登り詰めてなされるがままの人妻の身体を、ローテーブルの反対側へ

押しずらしていく。
（な……なにを、する、つもり……あっ!?）
縁から頭が落ち、顔が逆さになった。
紅革の首輪を巻いた細いうなじが反り、限界まで伸びて――。
「あぅ、あ、あぁ……」
いきなり視界を塞いだ黒い棒状の物体は、新たなペニスか。
長く太く、そして捩れが浅い。
（なぜそんな、あ、頭の先から……そんな風に見せびらかして……こんな、こんな、こんなおぞましいもので、いったいなにをするつもり……）
淫悦に朦朧とした頭で思う美沙子は、しかしなぜか、恐怖も嫌悪も淡かった。
泰之や南部、吉野や徳田とは違う、新たな男根――こんなにまっすぐな淫棒の場合、いったいどんな快感を産みつけられるのか――微かな期待を含んだ淫らな好奇心がグッポグッポと抉られている膣穴にどうしようもなく湧き起こる。
南部に犯された時点で泰之を裏切っていたのだ、この先何度犯されようと、だれにどんなことをされようと、たいした違いはない。ならば、愉しまなければ損ではないのか？　泰之の妻であることは諦め、牝の本能を剥き出しにして、肉の悦びに耽った

ほうがよいのではないか――と。
「ンぷっ!? ンぁ、あ……ンぉっぷっ!?」
喘ぐ口にねじ込まれる、新たな淫棒。
青臭く甘辛い牡肉に喉の奥まで穿たれて、美沙子は目を丸くした。
(やだ、嘘……く、口に……お、おちんちんっ!?)
あまりにいきなりのことで、嫌悪感を覚える暇すらなかった。
太く熱く青臭い肉の塊が、唇を押し退けて舌を掻き分け、狭い喉の中にまで傍若無人に潜り込んでくる。息苦しさが閃き、絶頂の予感が遠退いて――美沙子はようやく恐慌を来し、逆さになった顔が涙と涎、鼻水に濡れるのだが、
「おお……若奥様の、喉……ッ! どんな旦那か知らないが、毎晩毎晩こんな気持ちよさを無料で味わっているだなんて、ゆ、許せないな!」
ヌルヌルして熱く狭い人妻の細喉を犯している男は上機嫌だった。あまりの肉悦に赤鬼のような形相になりながら、乱暴な手つきで美沙子の弾む乳房を揉み始める。
硬い指先に揉み歪められた乳肉が甘く痺れて蕩けていくが、生まれて初めて口を犯された美沙子は、それどころではなかった。
(お、大きい……それに、変な味……く、臭い……おちんちん、き、穢い……!)

口腔を埋め尽くし咽喉を抉るたくましい肉棒の太さ、硬さ、熱さに、意識のすべてが集中してしまう。

泰之に求められたことがないから、頬張ることはもちろん舐めたことさえない。友人から借りたアダルトビデオで、裸の女優が一生懸命しゃぶっている姿を見たことはあるが、気持ち悪さが先に立ってほとんど記憶に残っていない。

なのに――。

「吉野さん様々ですな。こんな綺麗な人妻の喉を、こんな風に犯せるだなんて！」

見ず知らずの男が頬を赤らめ唾を飛ばし、嬉しそうに叫んでいる。

（ああそんな、そんなそんな、そんなぁ……！）

夫の知らない悦びを、夫以外の男に与えてしまうだなんて――。

しかもそれを、心地よいと感じてしまうだなんて――。

嫌だ、違う、自分はそんな淫らな女ではない――わずかに残った理性が悲鳴を上げているのに、身体は確かに感じていた。

膣を犯す淫棒が深く浅く、リズムを巧みに変えながら前後に動くと、たくましい弾力に擦り潰された膣膜が甘く痺れて蕩けていく。限界以上に伸びきって、出入りする淫茎にクチュックチュッと鳴らされている膣口には、快感電流が絶え間なく湧き――

腰から下の感覚は、いつの間にか完全になくなっていた。
（お、男の人が、悦んで、いる……泰之さんじゃないのに、私、私……）
自分の穴を犯した男たちがふたり、我を失うほどに昂っている気配が、なぜか誇らしい。出して欲しくない、これ以上穢れたくない――頭の隅では思っているのに、絶頂を予感した膣穴は鋭く絞れ、徳田のペニスを懸命にしゃぶる。保川に犯された唇や喉も、抜き差しされる淫棒のたくましさにうっとりと蕩け、甘やかに痺れ――。
「う……おぉっ！」
獣のような吠え声が聞こえ、男ふたりが同時に硬直。
美沙子の膣奥と喉奥に熱い粘液が迸り――。
「ンぉっ⁉　む……むぅ……ッ⁉」
呻く人妻の頬に、淡い恍惚の表情が浮かぶ。
男たちが果てた瞬間、美沙子の身体もほんの一瞬、快感の極みに達したのだ。
また出されてしまった、また穢されてしまった――夫以外の子種を、胎内の奥深い場所に、こんなにも、たくさん――。
込み上げてくる絶望はしかし、なぜか心地よく、精液を浴びた膣洞が小刻みに震えて緊縮する。男根を締め上げ、しゃぶり立てて、脈打ちながら迸る白濁液を自らの意

思で吸い上げているような――。
「おお、おお……よく締まる膣だ」
「喉もヒクヒクして、なかなか気持ちイイですよ」
――男たちの下品な声が、遠い。
（ごめんなさい、泰之さん……私、私……あなた以外の男に、あなたの知らない場所まで穢されて……なのにこんなに、感じてしまい、ました……）
背徳の実感は、なぜか甘い。絶頂というほどの高みには到達しなかったはずなのに、腕も脚も力が抜け、抵抗する気力が湧いてこない。
「よし、交代じゃ。今度は相良（さがら）くんが犯しなさい」
どこか遠くから吉野の声が聞こえ、ニヤついた男たちがいそいそと動いているようだったが――美沙子はもう、なにも考えられないほど疲れきっていた。

＊　＊　＊

――その後の記憶は切れ切れだ。
ホステスたちがこっそり拾い上げて隠していた札を、冷ややかな目をした津山がすべて取り上げ、「美沙子の稼ぎ」としてカウントしてくれたことや――そんな津山が皺くちゃになった一万円札を一枚一枚嬉しそうに数えながら、「あんなに悦ばれるな

ら、この店じゃなくソープに沈めるべきだったな」などと呟いたことなどが――前後の脈絡を失いつつ、美沙子の脳裏に浮かんでは消える。

髪がしっとり濡れているし、服もちゃんと着換えてあるから、シャワーは浴びたのだろう。だが、その記憶はすっぽり抜け落ちている。どんな顔をしてラ・ローズを出たのか、どういう経路でアパートまで戻ったのか――まったく覚えていない。

だから扉の前に立つ佐原を見ても、しばらくの間、なんの感情も湧かなかった。

「……くん、木原くん。大丈夫かね？」

大きな手で肩を掴まれ、心配そうな顔で覗き込まれて、ようやく我に返る。それでもなお、現実感は薄く、

「佐原、部長……どうしてこんなところに……？」

ぼんやりとした顔で虚ろに訊くのが精一杯。

「いや、こんな時間に申し訳ない。若い女性がひとりで留守を守っているのだからと、しばらくは遠慮していたんだが……この間もなにか様子が変だったし、今日の昼間に見かけたときも、いつものキミとは違うような気がしてね」

――まともな大人としての配慮を滲ませた遠慮がちな言葉と、元部下であり甥の妻である美沙子を心配したその表情が、壊れかけていた若妻の心を力強く抱き留めた。

周囲の音が戻ってくる。
自分の部屋の前だと理解する。
目の前にいるのが、父のように頼もしい男だと分かると――。
「ぶ、部長……私、私……」
凍りつきかけていた感情が一気に溶け、雪崩のように逝ってしまった。
「ど、どうしたんだね、木原くん!?」
驚き慌てる佐原の胸にしがみつき、声を上げて泣く美沙子。
もう大丈夫、初めからこうしておけばよかったのだ――会社の人ではあるけれど、佐原部長は夫の叔父だ。私がしでかした間違いを知っても、夫の未来を閉ざすような判断はしないはず――。
最後の希望を見出し、咄嗟に縋りついた美沙子は、
「泣いていては分からん、事情を説明しなさい……ああいや、まずは部屋へ入ろう。泰之の留守中に変な噂が立ってはいけないからな」
良識を滲ませて声を潜める佐原に震える肩を抱かれるまま、疑うことを知らない幼子のように小さくコクンと肯いた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

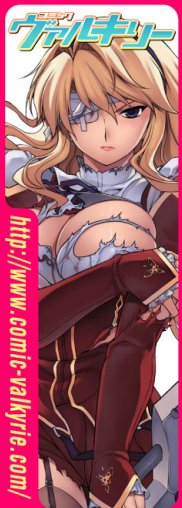
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!